

随筆を読む、随筆を書く

使用教材：「朝焼けの中で」（三年）



今回は、三年の最初の教材「朝焼けの中で」を使った授業をご紹介します。

最初にこの教材文を読んだとき、心の中がしんと静まる感覚がありました。こんな文章が書けたらいいなと思ったのです。

文章を読みながら「言葉の力」を感じました。この文章をお手本に、構成を学び、言葉を選んで随筆を書く、という単元にしたいと思いました。

単元に入る前に
教材文に使われている言葉を
味わう

「朝焼けの中で」を読むためには、まず、子どもたちが、この教材文に使われている言葉を理解し、使えるまでになっていることが大事だと思いました。

私は単元に入る前に、教材文に出ている言葉を使って百字程度のお話をつくる「言葉の小劇場」という学習をすることが多くあります（「言葉の小劇場」については、「国語教育相談室No.60」をご参照ください）。今回は教材文に使われている次の言葉で、百字程度のお話をつくりました。

ひんやり・色づく・絶妙な・
及びようのない・打ちしおれる・
涙ぐむ・いたわり・
言葉にならない・いとしさ

第一時
「朝焼けの中で」を読んで、
構成を分析する

まずは前時に行った「言葉の小劇場」の文章を読み合います。子どもたちが書いたものを、二つ紹介します。

【ひんやり】

私は森の中にいた。上を見上げても、木々に隠されて空の様子がわからない。少し歩くと土のやわらかい感触を感じる。空気が澄んでいる。深呼吸をしてみると、ひんやりとした空気で体が満たされる気がした。

【涙ぐむ】

点差はたったの一点だった。彼にとっては最後の公式戦。他のチームメイトが声を出して大泣きする中で、彼だけは、静かに涙ぐんでいた。それは、いつもクールな彼が見せた、たった一つの感情だった。

子どもたちの文章を読んでいると、「朝焼けの中で」を読んでいるときと同じような、しっとりとした世界が広がっているのを感じます。言葉そのものがもつ力強さを実感した後、教材文を読みました。

読み終わった後、子どもたちが「先生、私たち、ここまで来たんですね」と、つぶやいていました。それを聞いて、「言葉の小劇場」の学習が、導入として大きな役割を果たしたと感じました。

そして次に、左のように板書しながら内容を解説していききました。「朝焼けの中で」は、六段落になっているので、段落ごとに1～6の数字で示しました。

1. いつ？（場面設定） 導入
▼過去の体験（場面）
2. 体験の説明（具体化①）
▼もっと詳しく
3. 体験の考察
体験の意味（抽象化①）
4. 体験の印象（具体化②）
5. まとめ（現在の視点で）
▼体験の意味（抽象化②）
6. 結論
▼一文で（抽象化③）

この解説は、「朝焼けの中で」の内容を細かく読み取るためのものではありません。実際に随筆を書き始めれば、子どもたちはこの文章にしっかり向き合うことになると考えたので、この段階では、構成を理解することを目標にしました。子どもたちは、この段落構成をまねて随筆を書きます。

一年生のときから「具体化」と「抽象化」という言葉を学習してきた子どもたちなので、私の解説も理解できているようでした。今回も「具体化」「抽象化」の往復運動をしながら文章を書くことを経験させたいと考えました。

そして、いよいよ書くための材料探しです。子どもたちには、書くに値する「過去の体験」を探すように伝えました。最初のうちは、「そういう体験はないなあ」とつぶやいていた子どもも、数分後にはいくつかの候補を挙げていました。こういふとき、私は教室中を歩き回って、子どもたちとどんだん対話をします。題材を掘り起こし、膨らませ、自信をもたせるのです。そして、一人ずつ、いつのどんな出来事かを簡単に発表する時間を取りました。

「小学校二年の運動会でのこと」「おばあちゃんが病気になったときのこと」「幼稚園のときのけんかのこと」など、いろいろ



第二時
友達の書きだしを読み合い、
講評を聞く

前時に書いた子どもたちの書きだしを、一覧できるようにプリントして、さっと読み合いました。こんなふうに友達の書きだしを読み合うことは、子どもたちにとって楽しく、刺激をもらえる時間です。

随筆を読む、随筆を書く

■着想・書きだし集

- ・四歳か五歳のときだ。初夏の昼は思った以上に暑かった。私は家族と競馬場にいた。
- ・中一の秋だった。空は灰色に曇っていた。私はただ静かに眠る祖母を見て泣くしかなかった。
- ・五つか六つくらいの頃だった。外はじめじめしていた。私は父と狭い歩道を歩いていた。
- ・六歳、七歳ぐらいの頃。父とけんかして、リュックにいろいろ詰めこんで、家を無言で出て行った。
- ・小学校低学年のとき。作文を書いて先生に見せに行ったとき、お母さんと呼んでしまうことがあった。
- ・中三の最初。親とけんか。勉強のことで親に言われてけんか。

この時点で、すでに森崎さんの文章をまねて書くようとしているのがわかります。どの子も、幼いながらも描写を入れようと試みています。

そして、この「着想・書きだし集」を見ながら、一つ一つの書きだしについてコメ

ントをしていきました。そのときの私の発言をいくつか紹介します。

■今回の目標は「しっとり」ですよ。森崎さんの文章に学ぶのですから、全体から「しっとり」感が出ているかどうか気にしてくださいね。

■「描写」を大切にすること。そのときの状況を読者に「説明しよう」という意識をもちましょう。

■五感を働かせて。

- ・そのときに見えたものは何ですか？
- ・聞こえてきた音はどんな音？
- ・暑かった？ 寒かった？
- ・風は吹いていた？ においはどう？
- ・どんなふうに出ていったの？
- ・「無言で」「泣きながら」「足音を立てて」？
- ・どんな表情？
- ・テレビカメラでズームアップ。パン。

■「抽象化」と「具体化」の往復運動を意識しましょう。

■常体で書きましょう。「思った」に要注意ですよ。その「思った」という言葉が必要なのか、自分に問うこと。

■文の長さは、短く、ぱつ、ぱつと。ぶつ切りでもいいけませんよ。短い文と少し長い文。バランスという意識を。



昨年度は、受験の小論文を終えた子どもたちから「構成を考えてから書いた」「抽象化と具体化の往復運動を意識した」「最後の一文をびしりと決めた」などの報告があり、うれしい気持ちで聞きました。

最後に、この授業で子どもたちが書いたものの中から、一つをご紹介します。

* * *

短気

七つのときだ。雨は止みそうになかった。私は誰もいない玄関で、ある少女の前に立っていた。どんよりした空気が私たちの

■「この言葉でいいのか」「もつとびったりの言葉はないのか」と、自分に問いかけながら書きましょう。

■最後は一文ですよ。たったの一文。

そして、コメントした後、次のように板書しました。

随筆を書くために

- ・読み手のイメージを鮮明にしてい
- ・「説明しよう」という意識
- ・「描写」を入れる（五感）
- ・具体化と抽象化
- ・視点を動かす（見渡す・見つめる）
- ・文末表現
- ・言葉の吟味

第三時〜第四時

原稿の下書き・清書

いよいよ原稿書きに入ります。こういう時間はひたすら机間指導をします。子どもたちと本気で対話できる楽しい時間です。幼い語彙しかもっていない子どもにも、「こんな言葉もありますよ」「こんな表現もあ

間に漂っていた。予鈴が鳴った。

ザーザーと雨音が聞こえる中、私たちは無言だったが、口火を切ったのは彼女だ。

「ウザイのよね」。一瞬、彼女の言葉を理解できなかった。その意味が腑に落ちた瞬間、私は手に持っていた傘を、思い切り彼女に叩きつけていた。頭の中が真っ白だった。傘を握りしめていた手が冷たかった。

私はあの朝、初めて自分の短気を情けないと思った。ああ、やってしまったのだ。と。みぞおちがギリギリと痛んだ。なのにどうしてあのとき、「ごめん」のひと言が言えなかったのだろう。

その後、険しい形相をした先生に「あなたが叩いたせいで、彼女の唇が切れたのよ」と叱られた。大変なことをしたと思いながらも、謝れなかった。初めて人を傷つけた。

幼い頃から、友達を大切にしないといつも言われていたはずなのに、彼女の言動についてカッとなって、自分でも予測できない行動に出てしまった。悲しくて、悔しくて、恥ずかしくてごちゃごちゃだった。痛かっただろうな、彼女は。

人はときに、自分の感情をコントロールできない生き物なのだ。

第五時〜第六時

文集を読む・まとめ・講評・振り返り（あとがきを書く）

そして、下書きを丁寧に見て、鉛筆で添削しました。添削したものは、一人ずつ簡潔にコメントしながら返します。返された原稿を見ながら、どんどん清書をする子どもたちの姿は、とても頼もしく見えました。

最後に、全員の文章を文集にまとめ、子どもたちに配りました。今回は、私が朗読して紹介することにしました。上手に朗読すると本当にいい文章だなと思えます。ここは教師の腕の見せ所です。文集を読みながら、子どもたちに「いい表現だな」というところが線を引かせます。「おーっ」という声が上がると、とてもいい時間になりました。

実は、このようにして文章を仕上げた経験が、後の高校入試でも生きてきたのです。